

『ひょうご歴史研究室紀要』第三号の刊行にあたって

三号雑誌—という見通しの暗さを連想させますが、わたしどもの『ひょうご歴史研究室紀要』も三号を迎えることになりました。三号で終わらず、四号、五号と継続していく所存ですので、ご愛読のほどよろしくお願い申し上げます。

さて本号は、創刊号の『播磨国風土記』、次号の赤松氏と山城（城跡）について、三年目の主題であったたら製鉄研究班の調査研究の成果が中心となっています。幸い、特集「播磨のたら製鉄」については、今年度より共同研究員にお迎えした土佐雅彦氏による「特集にあたって」が、要にして簡を得た紹介となっていますので、あえて屋上屋を架することは止めておきます。その代わりに、この三年間の研究室の活動を通じて感じていることを述べさせて頂きたいと思えます。研究室の折り返し地点にあつて、なにがしかの意味があるのではないかと期待します。

感じていることは三つありますが、第一に、「播磨は広い」という領域的な広さを上げたいと思えます。大阪から姫路に通勤している身には、中播磨に属する姫路も結構、遠いのですが、西播磨は、そこからさらに遠くにある、ということを感じています。とくに昨年暮れに、上郡町でひょうご歴史文化フォーラム「発祥の地、赤松から考える—赤松氏研究の新展開—」、佐用町で利神城跡国史跡指定記念シンポがそれぞれ開催され、立て続きに出席することで、姫路との距離を再認識した次第です。加えて、それぞれの地元の関心の高さと熱心さは、驚きの一言。なんと、三〇〇名前後の参加があるのです。博物館の地下ホールの定員一〇〇名を念頭に置くとき、すごい数字だと理解されます。熱意に打たれない方がどうかしているでしょう。

それに三年目のたら製鉄研究班は、宍粟郡を主たる調査地としているのですから、『播磨国風土記』研究班から始まった研究室の活動は、赤松・山城、たら製鉄と主たるテーマを移動させることで、広大な播磨全域に足を運ぶチャンスをわたしたちに与えてくれているのです。

第二に、考古学と文献史学の交流の面白さを上げたいと思います。ひょうご歴史研究室の手法を一言で言うとするれば、まさにこの点にあります。地上に残る資料を読む専門家と、地下から出土する遺物を読む専門家が、ガッチリと組み合うことで、『播磨国風土記』の中身にも、赤松氏の歴史にも、たたら製鉄の世界にも迫ることができないのではないか—という実感を、研究室のメンバー全員が共有していますと信じます。それは、現地調査はもちろん、研究室例会やシンポジウムへの出席率の高さに現われています。日頃の多忙な業務をこなしながら、また専門の知識と現場を背景に、みなさん、議論を戦わせることに楽しみを感じておられる、とわたしには思えます。室長として、もつとも嬉しいことです。

そして第三には、県内外の自治体・研究機関などとの連携の妙があります。第二号に上郡町教育委員会三木一司教育長、本号に宍粟市教育委員会西岡章寿教育長が、それぞれ玉稿を寄せて頂いたことが念頭にありますが、わたしたち研究室の成果を、子どもたちの教育に、人づくりに活かそうとされていることに感動を覚えます。研究のための研究でなく、教育のために、町づくりのために、生涯学習のために、地域意識の醸成のために、活かす道筋を考える上で、とつても重要なことを教えてもらっているように思えます。研究室のある博物館に閉じこもりがちで、専門家だけの議論に満足しがちなわたしたちの習性を、是正する上で大きな力となるものです。

たたら製鉄研究班は、今年度の活動を通じて島根県古代文化センターとの交流を深めています。風土記班も、淡路島日本遺産委員会との交流を進めています。こうした交流が一つの流れとなって、ひょうご歴史研究室の足腰を強化することになれば、と願うこと切なるものがあります。

平成三〇年三月

兵庫県立歴史博物館長・ひょうご歴史研究室長

藪田 貫